

「世界のリーダーたちよ」

藤田 二誓

「のどが乾いてたまりませんでした 水にはあぶらのようなものが一面に浮いていました どうしても水が欲しくて とうとうあぶらの浮いたまま飲みました ―あの日のある少女の手記から―」

長崎県平和公園の平和の泉前に建つ石碑に、そう彫られていた。母と旅行で長崎を訪れ、その石碑を初めて目にした私は、声も出せず、ただ震えた。あの日、1945年8月9日。午前11時2分、長崎にアメリカ軍による原子爆弾が投下され、一瞬にして建物は全焼し、人々は爆風に吹き飛ばされた。原爆で体内まで焼きただれた数えきれないほど多くの被爆者たちが「水を」「水を」とうめき叫びながら、死んでいったという。原爆で飛ばされたはらわた、頭をもがれた赤ちゃん、男とも女ともわからない足だけ、頭だけが転がっていたという。そんなこの世のものとは思えないほどの光景の中で、少女はあぶらの浮いた水を飲みながら何を思っただろうか。生まれた国を、生まれた時代を憎んだだろうか。

平和を誓った終戦から79年が経った今年、日本は石川県能登地方を震源とする大地震が多くの人々の幸せな元旦を襲い、200人以上の大切な命を躊躇なく奪っていった。妻子を失い途方に暮れる男性や、安否不明の父親の名を叫び続ける女性がニュースで取り上げられていた。そんな中、かつて戦争で日本とかけがえのない命を奪い合ったアメリカが、アメリカ軍による後方支援や、食料などの物資提供を行った。能登半島地震はむごい光景を残し、人々に張り裂けるような悲しみを与えたけれど、人種や国籍、宗教さまざまな人々が、復興復旧に向けて手を取り合っている。

その反面、国を守るためと言いつつ、核兵器を保有し、同じ過ちを繰り返す国々がある。能登半島地震で日本の支援を行ったアメリカをも含む9か国が、終戦から79年の月日を経た今も核の保有国である。世界中の1人1人が未来に向け、永久に平和を望む時代となったはずである今も、世界のどこかで理不尽に奪われていく尊い命がある。冷たく不気味な音を立て、低く上空を通過していく戦闘機に怯える毎日。標的を粉々にする爆弾が、ひゅうひゅうと続けて降ってくる恐怖。すべてが非現実的で異常で不自由な日々を生きる人がいる。人間は愚かにも戦争を繰り返している。無差別に人々の命を奪い、人々を苦しめ続けてきた地獄そのものである戦争や核兵器が、なぜ未だに禁止されていないのか。世界は数々の無意味な戦争を経験し、戦いの果てには、残酷な光景と煮えたぎるような憎しみしか残らないことを知っているのに。

世界のリーダーたちよ。脅かすことでしか守ることのできない愚かな権力などいらない。目を覚ませ。耳を澄ませ。心を持て。世界のリーダーたちが動かず、誰が世界を変えられるか。これから私たちが生きる未来に戦争はいらない。核兵器はいらない。この星に住む私たちは今、数分で核戦争が始まるような危険の中に生きている。そして世界は地球規模の気温上昇で、巨大台風の発生や土砂災害、大河川の氾濫、地震など、100年に1度の異常気象

が毎年のように繰り返され、深刻な危機に直面している。新型コロナウイルス同様、危機を危機だと感じなければ、本当の変化は起こらない。あの日の原爆の記憶を語り継ぐ長崎からであれば、19歳の私の声でもあなたたちに届くと信じている。人種や国籍、宗教さまざまな違いを認め合い、全世界で心をひとつにすることは難しいことではない。私たちの未来より大切なことがあるだろうか。今こそ、平和の約束を果たすべきだ。世界中のすべての人々が、人として生きられるように。自分の人生を全うできるように。

私は今、英語の教員になりたいという夢を叶えるため、大学で語学だけでなく、世界の歴史や世界の文化について学んでいる。知らなかった世界を知ることは、私の視野や可能性を広げてくれたとともに、私はこんなにも素晴らしい星に生まれたのだと感動した。この星に生まれてくるすべての子供たちに平等に満ち足りた幸せを感じてほしい。だから私は、どんな人との間にも隔てる心の壁はないこと、握り合えない手と手はないことを授業を通して伝えられる教員になりたい。もう誰にも生まれた国を、生まれた時代を憎ませてはならない。もう誰にもあの日のある少女のようにあぶらの浮いた水を飲ませてはならない。

“I pray that everyone in the world will be equally contented and happy.”

「どうか、世界中のすべての人に平等で満ち足りた幸せを。」